た。

カザンへの帰途、再び疾駆するワゴン車の中で、私は来たときとは違ったある安堵感のようなものの中にあった。

ロシア――この我々にとっていかにも解り難い存在、それでいて今後永い将来に亘って隣人としてつき合っていかなければならない広大な巨人の国。

私はその時胸中にあった一つの感慨を表現するのに、司馬遼太郎の言葉を借りるのが尤も適切だと思う。氏は言われる。「国家にも心理学が適用できるとすれば、この二つの国の関係ほど心理学的なものはない。」心理学とはつまり喜怒哀楽の範疇であろう。二百年に亘る両国の歴史には、喜と楽の交錯はほとんどなく、いうなれば怒と哀の連鎖のみが多かった。だからして「堅牢な理性とおだやかな国家理性…でたがいを見ることができる…にはよほどの歳月が必要かと思われる。」（「ロシアについて」から）

あれから僅か半年の間に、かの国では歴史的な大変化が息ずまる緊迫感を伴って進行中である。これが両国の歴史の上にどのような一石を積み上げるか。我々は正に「堅牢な理性」の場で注目する必要があるだろう。

（神戸製鋼所相談役・東大・法・昭19）

ゆっくり急げ

日本発㈱名誉会長
神奈川経済同友会代表幹事
故 坂本寿（さかもとひさし）

思えば大正十一年、高知商業の卒業時に、私は一流銀行に推薦（すいせん）されていた。商業学校の卒業生にとって、それはまたとない、いい就職口で、名誉なことであった。それなのに、私はその銀行をあっさり断った。人の稼いだ金を扱うなんて、まっぴらだと思ったからである。

「先生、わしは神戸の鈴木商店へ入りたい。学閥がのうて、実力次第の鈴木商店へ行きたい。あそこは成績さえよけりゃ、外国へもやってもらえるといいますやろう。わし、一生懸命働いて、出世がしたいですきに」

当時、その一流銀行の月給は三十七円であった。鈴木商店は九円である。父が事業に失敗して家計は相当苦しく、私は貧乏な学生生活を送っていた。南国土佐とはいっても、冬はやはり寒い。冬服すら買えず、白い夏服を黒く染めてごまかし、その下にシャツ一枚で通したいた頃である。

幸い、鈴木商店へは入社できた。したがって、ぼくは大学へ出てない。学歴はないに等しいのである。が、鈴木商店では二年間の見習い期間、つまり、〝ボンさん〟と呼ばれる修業期間を終えると、正社員になれるための昇進試験を受けなければならない。そのために私は、神戸高商の夜学に通った。

九円の月給をもらっても、当時は手元に金などまるでなかった。月謝は会社が負担してくれるが、基本的に夜学へ行くのは本人の自由意志である。夏・冬用の詰襟の制服を会社から支給される以外は、教科書やノートや交通費は、すべて自分でまかなわねばならない。毎月父にに二円の送金をしていたのだから、懐（ふところ）はいつも寒々としていた。

だから、寮から会社へ行く時も電車賃を惜しんで、歩いた。夜学へ登校する時は時間がないので仕方なく電車に乗るが、帰途はまた歩く。

しかし、それだけによけい負けじ魂を発揮して、ひたむきに勉強した。昼間の労働の疲れが出て、油断すると、ついうつらうつらとなるが、「せっかく勉強にきたのだから、己に負けたらあかん」と自分を励まし、黒板をにらんでいたものである。

心身を鍛（きた）えられるというのは、この頃のことを指すのだと思う。世間の遊びや人とのつきあい方に頭を悩ましたり、懐の心配をしないで済むときに、自分を鍛練しておくことは大切なことだ。十代には十代の過ごし方があるように、二十代、三十代には、その年齢に応じた生き方がある。

というのも、人間は生きる環境を選ぶことが不可能だからである。その人の器量に見合った環境が、また、その人の生活力にふさわしい環境があるだけである。世間は十代の人間に、二十代や三十代の人間がもっている力など要求しないし、二十代の人間に、三十代や四十代の能力を求めたりはしない。

人生が「牛のよだれ」だとか、「うさぎより亀の歩み」といわれるのも、そこだ。階段をコツコツ登るようにして、人は世間を知り、社会に迎えられていく。

だからこそ、学生時代は学生時代にしかできないことをした方がいい。ぼくは苦学生だったから、働くことも、勉強することもまっすぐに考えた。間違っても、他人と比べて、自分が不幸だとか、辛いことをしているとは思わなかった。

それは、高知商業卒業時に、すでに自分の人生を自分で選びとっていたせいかもしれないが、深夜、四十分ほどかかる道のりをひとりで帰る時も、不思議と寂しい気持ちになることはなかった。靴底には鉄（かね）を打っていた。やっとの思いで買った靴である。すりへるのを惜しみ、ない知恵を絞って工夫した。その靴音が響いても心寂しくはなかった。

心身を鍛えようと、再度山（ふたたびさん）へ早朝登山をしたのもこの頃である。雨が降っても、雪が降っても、海抜五、六百メートルの山へ登る。冬の早朝はまだ暗いので、足元をちょうちんで照らしながら登った。合計百二十七回の早朝登山を試みたことを、現在でも記憶している。

思えば夢中で過ごした〝ボンさん〟時代であった。時間も限られ、金もない。ただ忍耐と頑張りだけでとおした二年間である。ありがたいことには、見習い社員から正社員になるための昇進試験には、合格した。同期十八人の〝ボンさん〟のうち、合格したのは私一人だけだった。

努力はむくはれたのだ。

この時の喜びは今でも忘れられない。暗い谷底から自力で山の頂きに辿（たど）りついたような、爽快な気分がしたものだ。

若い頃は、思うままにふるまうのもよし。目的は大きければ大きいほどよいと思うが、かといって、夢ばかり見ていても、日は暮れる。足元の階段を踏みはずさず、ゆっくり急げばよいのだ。そして、この時期にはそうした心身の「素肌」を鍛えておくことが大切である。

（『学生時代の何が役に立つか』講談社昭六一。）より転載

神戸大学経済学部 教授 桂 芳男 氏 寄稿